

古川 知明

(埋蔵文化財センター所長)

はじめに

近世富山町石工は、富山藩期城下町内に工房を有する町石工である。富山町石工の刻銘のある石造物を調査した結果、これまでに9人を確認した。その後の調査において、新たに「伝助」の石工名を確認した。本稿では、石工伝助が製作した石造物について検討を行い、伝助の石造物製作の実態について明らかにすることを目的とする。

1 研究史

富山町石工による石造物は、砺波市芹谷山千光寺の天明6年(1786)造立宝篋印塔に「越中富山住人 大石工 佐伯伝右衛門」の石工名が報告された〔尾田 1995〕。

筆者は富山町石工の製作石造物の集成を行い、8人の石工名を確認した〔古川 2012a、2013、2014、富山市埋文センター編 2014〕。佐伯伝右衛門は勝行と吉忠の2人がおり、勝行が富山町石工で最も古い。伝右衛門は、祥雲文・波涛文等の浮彫文様を採用して富山県東部の近世石造物の伝統的意匠の礎を築き、また初期塔には基礎の四脚化、龍文の浮彫文様の支え石、唐獅子牡丹の浮彫文様など独特の意匠を採用し、技量の高い石工であったと評価できる。

2 伝助製作石造物の概要

伝助が製作した石造物は、刻銘品2件がある(表1)。

(1)滑川市坪川一字一石塔群(市史跡「一里塚」)(図1)

滑川市の海岸部、旧北陸街道沿いに所在する一里塚は、富山町から4里の位置にある。塚は陸側の1基が残る。塚上には5基一式の石塔群が置かれ、主標となる奥中央の石塔は「法華塔」と陰刻のある笠付方形の一字一石塔である。他の4基はこれに付随する。

石塔1は、高さ7尺6寸(230.3cm)で、上から宝珠・笠・軸・蓮台・基礎2段・基壇2段の8段構成である。宝珠は球形で先端は欠損する。笠は唐破風形で、破風上部に獅子口、下部には懸魚が付く。破風板は3段である。獅子口の中央には宝珠、懸魚の中心には円形浮彫の中に卍形の陰刻が付く。屋根は緩やかな向くり形で軒反はない。軸は方柱形の板碑で、正面は額の中を一段彫り下げ、「法華塔」を丸字楷書で陰刻する。彫りは深く最大3cmである。右側面には「日月清明国土昇平／皇風永扇兆民頓誠」、左側面には「字字円頓久遠成功／石石実相寿命〔月＋廣〕空」とある。語句は「仏説無量寿経」(T0360)「諸回向清規」(T2578)等の経文から引用し造文したと思われる。裏面には「天明二秋彼岸日／徳城本大愚慎誌」とあり、天明2年(1786)滑川市四間町の曹洞宗神明山徳城寺の18世大愚厚本住職〔滑川町役場編 1913〕が謹誌して造立したことを記す。蓮台は平面方形で、蓮弁は主弁6葉×2段、間弁6葉の計18葉である。主弁先端は突出して反る。基礎は2段で、上段は側面4面ともに周囲を0.8寸幅で縁取る。内側は一段高く、ハツリ痕・ビシャン叩きによる簾状叩き痕をわずかに残す。下段は切石2石を横置き、正面には面一杯に「福德」と篆書体で彫る。裏面右には「化主／宜謙」とある。化主とは高德の僧を意味し、大愚住職の関係僧あるいは徳城

表1 伝助製作石造物一覧

番号	在銘年号		所在地	寺院情報	種類	石工名表記	石材	備考
	和暦	西暦						
1	天明2	1782	滑川市坪川市史跡一里塚	曹洞宗神明山徳城寺	一字一石塔	石工／富城 伝助	安山岩	5基一式
2	寛政8	1796	富山市堀川町	真言宗日養山神宮寺	宝篋印塔	富城／石工／伝助	安山岩	寛政12年上野氏寄進燈籠付随

寺ゆかりの僧と思われる。裏面左側には「富城／石工／伝助」とある。基礎より上は安山岩である。基壇は花崗岩切石で、下の台石は、花崗岩玉石半割品を横置きする。上面の本体基壇との合端部分はハツリ整形で平らにする。側面に礫表皮を残す。

石塔 1 の左右には、円頂方形の石塔 2・3 が置かれる。同寸同大で刻銘のみが異なる。軸は円頂方形の板碑である。右の石塔 2 の軸には、正面「阿弥陀如来」裏面「乃至法界平等利益」、左の石塔 3 の軸には、正面「観世音菩薩」裏面「十方施主三世安楽」と陰刻がある。蓮台は石塔 1 と同型式である。基礎は方形切石である。台石は石塔 1 と同様花崗岩玉石を輪切りして横置きしたもので、矢穴列と矢穴痕が残る。

一里塚上の前部には、円板形の石塔 4・5 が左右に置かれる。右の碑には正面「不動」裏面「万神」、左の碑には正面「大黒」裏面「諸天」とある。方形基礎上面に長方形の穴があり、そこに碑下部をはめ込む。台石は花崗岩玉石を輪切りして横置きする。矢穴が残る。

法華塔を除く 4 基は、如来・菩薩・明王・天部といったすべての仏像形を包括表示し、それを代表する形で正面に 1 尊の名称が表示されている形態と理解される。

(2) 富山市堀川町神宮寺墓地宝篋印塔 (図 2)

真言宗日養山神宮寺の南東 300m の神宮寺住職墓地内に所在する。宝篋印塔は寛政 8 (1796) 年に造立された。相輪・笠・塔身 4 段・基礎 3 段・板石組基壇 2 段の計 11 段構成である。相輪の上半分・軸 1・請花が欠落する。本体高さは、推定高 87.25 寸 (264.4cm) である。基壇はコンクリート上にあり、当初の位置は不明である。相輪は九輪 5 段目より上を欠失する。九輪の径は上下でほぼ同じで、輪間の掘り込みは浅い。下部請花は花卉の上縁が花頭形になり、弁縁は縁取がされ盛り上がる。笠は軒上 2 段軒下 2 段であり、上 3 段は階段状である。軒の正面には、円の中に木瓜紋の彫り込みがあり、「丸に木瓜」紋の家紋と思われる。隅飾突起は、57.5°の角度で外側へ広がり、内側は弧状である。隅飾突起外面の文様は、突起上端のみ輪郭を巻いた弧下端が渦巻状となる。塔身は軸 1 を欠失し、反花、

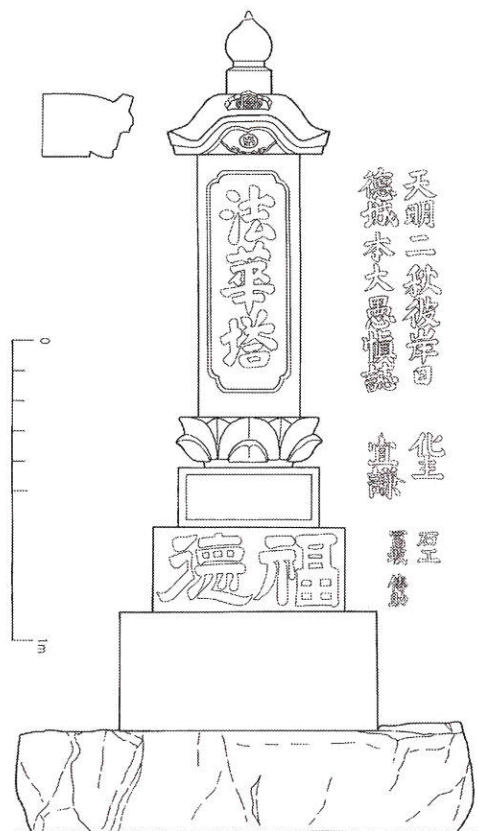


図 1 坪川一字一石塔

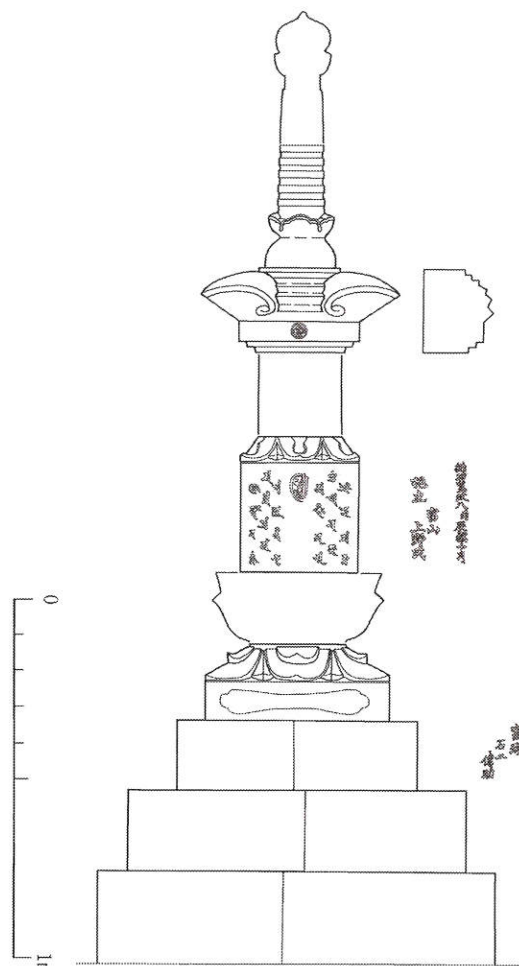


図 2 神宮寺宝篋印塔

表2 神宮寺宝篋印塔規格

区分	部位	高さ		幅		石材	備考
		寸	cm	寸	cm		
相輪		23.5	71.2	6.6	20.0	安山岩	上半欠損。推定高
笠		7.75	23.5	15	45.5	立山天狗山石	軒上6段、軒下2段。隅飾突起外傾角57.5°
塔身	軸1	7.5	22.7	7	21.2	立山天狗山石	欠損。推定高・推定幅
	反花	2.3	7.0	11	33.3		軸2と1石
	軸2	10.2	30.9	11	33.3		正面梵字「シッチリア」の左右に光明真言梵字、裏面造立年・施主
	請花	6.5	19.7	16	48.5		欠損。推定高・推定幅
基礎	反花	3.4	10.3	16.5	50.0	安山岩	基礎と1石
	基礎1	3.6	10.9	16.5	50.0		正面に額彫り込み
基壇	基壇1	6.4	19.4	22.5	68.2	安山岩	2石組。右側面に石工名刻銘
	基壇2	7.5	22.7	31.5	95.4	安山岩	6石組
	基壇3	8.6	26.1	37	112.1	安山岩	7石組
計		87.25	264.4				

饅頭形、軸2、請花の順となる。反花は、主弁8葉で間に間弁を置き計12葉である。主弁は丸く、内側は達磨形に浅く彫り込む。間弁はやや厚い。軸2は4面に刻銘がある。正面は、中央にやや大きく梵字種子「シッチリア」（宝篋印陀羅尼）を陰刻し、左右に3行ずつ光明真言梵字を陰刻する。右側面は「維時寛政八丙辰歳十月／施主 富山 上野氏」とあり、寛政8年（1797）に富山城下町在住の上野氏が造立したことを記す。裏面・左側面には2人ずつ計4人の戒名がある。居士1・大姉2・童子1で、造立者上野氏の肉親と推定される。基礎上段の反花は主弁8葉で上下2段である。間に間弁を置き計24葉である。下段は方形壇で、側面は四面ともに横長額形を陰刻し、中は無文とする。額形の長辺中央の幅を狭くし、装飾性を高めている。基壇は切石による3段の階段状方形壇である。1段目は2石を置き、右側面の右側に「富城／石工／伝助」と石工名を刻銘する。2段目は6石、3段目は7石である。

この宝篋印塔は、寛政8年富山城下町に住む上野氏により神宮寺に寄進された。神宮寺過去帳によれば、その年は43世寂秀法印代であり、死去1年余り前の造立となる。

宝篋印塔の正面右横には四角型燈籠1基がある（図3）。竿正面には「寛政十二庚申年九月吉日／上野絶父謹具」とあり、奉納者上野氏の亡父供養のため、寛政12年造立した経緯を記す。造立は宝篋印塔造立の4年1か月後で、宝篋印塔造立者上野氏とは同一人物またはその子で、宝篋印塔に追贈したものである。伝助の製作か否かは不明。上野氏とは、中世太田保の国人上野彦次郎の末裔である金泉寺屋市郎右衛門とされる〔堀川町町内会編2010〕。

3 伝助についての分析

(1) 刻銘（図4） 2基の石造物における刻銘は、いずれも「石工」・工房所在地・石工名前の3語句が表記される。順序や字体は異なり、別人の筆跡とみられる。いずれも本体石造物の刻銘文字と一連の筆跡であることから、その下書者（僧職者等）が、石工銘も含めて下

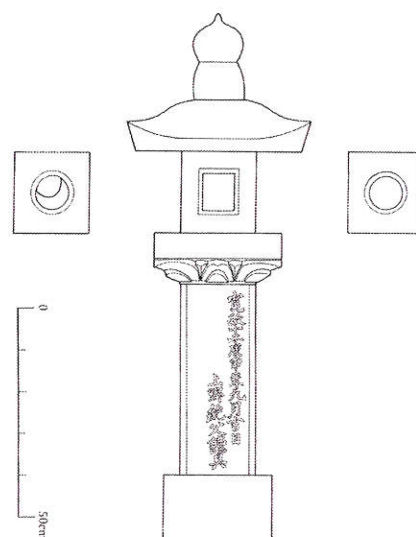


図3 上野氏奉納燈籠



図4 石工名刻銘

上：坪川 下：神宮寺

書きし、それを伝助が彫ったと理解しておく。

(2)分布 2基のみの分布であるが、工房がある富山城下町内には製作品がなく、1里離れた城下町の南方近傍地、4里離れた一里塚等がある。佐伯伝右衛門も同じ傾向である(古川 2013)。

4 伝助の評価

伝助は、富山町石工のうち石工名刻銘を行った最も古い石工である。伝助は墓石に近い型式の石塔から始まり、その造形の完成度は高い。宝篋印塔は佐伯伝右衛門の方が早く、10年遅れる。伝右衛門の精巧な宝篋印塔とは造形が異なるものの、伝助の石塔も以後主流となる基壇階段状の宝篋印塔型式の様相を完備しており、造形の完成度も高い。よって伝助は、佐伯伝右衛門とともに、初期富山町石工として以後の富山中央部の石造物製作の技術伝統の基礎を築いた石工と評価できる。

なお、伝助の名前は、佐伯伝右衛門と同じ「伝」である。年代差から伝右衛門が伝助から「伝」の一字をもらい独立したと考えられるが、伝右衛門は苗字・通称・名前ともに名乗る、当初から自ら「大石工」と表記するなど格式の高さを意識していることから、伝助と伝右衛門の両者に共通する棟梁(伝右衛門)が存在し、伝右衛門側が正統な後継者として襲名したとも理解される。今後資料の蓄積を待つて解明する必要がある。

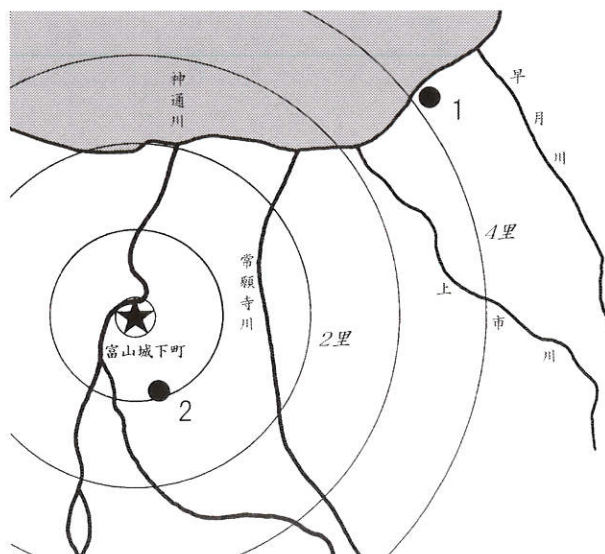


図5 伝助分布図

おわりに

伝助の製作品における特徴の抽出や他石工との様式比較については十分な分析ができていない。今後の課題としておきたい。

本稿作成にあたり、平井一雄氏、東薬寺ご住職、神宮寺ご住職のご理解ご協力を得た。記して謝意を申し上げる。

文献

- 尾田武雄 1995 「芹谷山千光寺周辺の石造物中間調査報告」『土蔵』第8号 砺波郷土資料館 土蔵友の会
富山市教育委員会埋蔵文化財センター編 2014 『富山市内石造物等調査報告書Ⅲ』
滑川町役場編 1913 『滑川町誌』
古川知明 2012a 「近世富山町石工について」『富山市の遺跡物語』第13号
古川知明 2012b 「富山県東部における近世石造物研究—主に石工研究から—」『北陸の石造物—研究の現状と課題—』石造物研究会
古川知明 2013 「富山町石工佐伯伝右衛門について」『富山市の遺跡物語』第14号
堀川町町内会編 2010 『堀川町町誌』

富山市教育委員会埋蔵文化財センター所報
富山市の遺跡物語 第16号

平成27(2015)年3月31日

編集・発行 富山市教育委員会埋蔵文化財センター

〒930-0091 富山市愛宕町1-2-24

TEL076-442-4246 FAX076-442-5810

E-mail:maizoubunka-01@city.toyama.lg.jp

印刷：有限会社ヤツオ印刷